千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム

# 私たちの柏の歴史

## ― 牧から街へ ―

History of Kashiwa

全体の目次

前書き　p. 1
序　章　現代－柏の葉地区の歩み－　p. 2
第１章　原始古代　p. 12
　Ⅰ　柏の遺跡　p. 13
第２章　中世　p. 33
　Ⅰ　古代から戦国時代の柏市域　p. 35
　Ⅱ　柏市の製鉄遺跡　p. 50
第３章　近世　p. 57
　Ⅰ　江戸時代の柏と小金牧　p. 59
　Ⅱ　柏の水運－手賀沼と利根川の開拓と物流－　p. 74
第４章　近代　p. 85
　Ⅰ　小金牧の開墾－十余二地区を中心として－　p. 86
第５章　柏市の農業　p. 93
　Ⅰ　昭和から平成までの変遷　p. 94
　Ⅱ　柏市の農業　トピックス　p. 105
第６章　（小金牧）十余二開墾物語　p. 116
　Ⅰ　小金牧の開墾－入植時の苦労話－　p. 117
　Ⅱ　十余二の土壌と栽培作物に関する話　p. 118
　Ⅲ　サツマイモ・農業に関する話　p. 119
　Ⅳ　柏飛行場の開設に関する話　p. 120
　Ⅴ　戦後の農地改革・金属工業団地に関する話　p. 120
柏市とその周辺の歴史年表　p. 122
制作メンバー一覧　p. 126

## はじめに

この書籍の制作は、2017 年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム A コース『柏の歴史、文化、産業』の開講がきっかけになっています。柏市に長年居住している人でも、柏地域の歴史や文化、そして経済についてよく知っているわけではありません。そこで、柏市のことを勉強するというプログラムが企画されました。

このプログラムを通して柏市の歴史に興味を持った市民が集まり、大学と一緒になって、地域の歴史について勉強したり、調べたりして、この書籍を完成させました。2018 年 1 月 20 日に第 1 回のミーティングが開催され、2020 年 2 月 22 日まで 20 回以上のミーティングを重ねて作りあげました。

地球上のどこの地域にも、地域ごとに先人たちの歴史があります。その歴史が幾重にも積み重なり、私たちが生活している現代に繋がっています。この書籍は千葉大学柏の葉キャンパスが位置する十余二地域を中心にして、まとめてあります。この書籍を手に取った方がこの地域の歴史を知ることで、この地域への愛着を少しでも持っていただけたら幸いです。

なお、2017 年の千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラムは柏市教育委員会文化課と経済産業部に協力していただきました。そして、この書籍の作成には、プロジェクトの立ち上げ当初から柏市教育委員会文化課に多大なるご協力いただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

2020 年 9 月 1 日

千葉大学環境健康フィールド科学センター
野田勝二

# 第５章　柏市の農業

## 目次

Ⅰ　昭和から平成までの変遷
1.　概要　p. 94
2.　純農村地域から住宅地域への変遷　p. 94
(1)　昭和の初め（1926～）　p. 94
(2)　昭和 16（1941）年　p. 95
(3)　戦後から（1945～）　p. 95
(4)　昭和の終盤から平成中期　p. 96
3.　柏市の農業の特徴　p. 97
(1)　多様化してきた柏市の農業　p. 97
(2)　兼業農家の増加と離農の進行　p. 97
(3)　収入にみる農家の特色　p. 100
(4)　都市近郊農業としての特徴　p. 102

Ⅱ　柏市の農業　トピックス
1.　概要　p. 105
2.　柏市の農業－特産農産物紹介－　p. 105
(1)　豊四季のサトウキビとカブ　p. 106
①　豊四季のサトウキビ
②　豊四季のカブ
(2)　十余二のサツマイモ　p. 109
(3)　現在の柏市の主要農産物　p. 111
①　ネギ
(4)　柏市でしか栽培されていない野菜－根芋－　p. 112

## Ⅰ　昭和から平成までの変遷

### 1.　概要

柏市は、首都東京の 30 ㎞圏内の地域に位置しています。都心へ直接つながる鉄道や道路網も発達しており、都心へのアクセスの利便性も高いといえます。このような立地と利便性に恵まれた柏市は戦後になってから人口が著しく増加してきました。人口の増加に伴い、駅前や市街地への金融機関・大型店舗・百貨店などの進出によって、商業を中心とする第３次産業が発達し、さらに工業団地の造成や工業の事業所数の増加によって第２次産業も発達してきました。一方、第１次産業の農業については、人口の急増に伴い、離農が進み農家戸数や耕地面積が年々減少していく中で、消費者の好みに合わせた観光農業や野菜類栽培を中心とした都市近郊農業への転換が見られます。

本章を通じて、都市化・商業化の進展に対応していく農業の姿と、現在の柏市の農業を紹介します。

### 2.　純農村地域から住宅地域への変遷

柏市の農業は農地の転用が戦後急速に進み、商・工業地や宅地になり専業農家が少なくなりました。その中でも、専業農家の割合が比較的多く柏市柏の葉地区に隣接する田中地区の農家のお年寄りの話をまとめました。

#### (1)　昭和の初め（1926～）

田中地区の大部分は専業農家でした。現在のように機械化されておらず、鍬・鎌などの道具を使い人力で農作業をしていました。主な農産物は、コメ、ムギでした。野菜は、サトイモ、ホウレンソウ、ショウガなどを作っていました。現在ほど多くの種類の作物を作らず季節に応じてできた作物は馬車で柏駅まで運び、貨物列車で東京の市場へ送られました。当時は、コメ、ムギの収入に頼り多角経営は見られませんでした。農作業をすることが少ない冬の時期には、茨城県方面に農産物を売りに行ったり、出稼ぎに出たりして副収入を得ていました。また、地主制度による貧富の差がありました。小作人は年末になると年貢などを納めたり、地主の家の仕事を手伝ったりしていました。

(2)　昭和 16（1941）年

太平洋戦争が始まり、戦争遂行のために軍需品を中心とする生産力拡充に力が入れられました。その結果、日常生活必需品が極度に不足して、衣服や食べ物などが配給制になりました。男性は兵役にとられ働き手がなくなりましたが、政府からは食料増産を求められました。また、国に売り渡さなければならない（供出）米の量が増え、保有米の量は生活ギリギリでした。

(3)　戦後から（1945～）

農地改革により地主制度がなくなりました。これにより、小作人も独立した自作農として農業経営が可能となり、農家はコメ、ムギから、年間を通して収穫できる野菜中心の経営に変わりました。農業収入が増え、農業協同組合を中心に出荷体制が整い、直接東京市場などと契約するなど有利な存在となりました。

そのような流れの中、昭和 27（1952）年頃には農業経営に関心が高まり、一部の農家が研究サークル活動を始めました。ビニル栽培が取り入れられ、これがハウス栽培に発展しました。昭和 29（1954）年に柏市域に市制がしかれ、多くの農地が住宅や工業団地の造成のため買収されたため、地主的存在の人たち以外の小規模な農業経営をしていた人たちは、生活の採算が取れなくなり、農業経営に行き詰り、年間を通して平均して収入が得られる作付けをしないと赤字に落ち込んでしまいました。

昭和 40（1965）年代初め頃から、促成栽培[注1]などの新しい栽培方法により出荷できる農作物の種類が増え、田中地区の野菜は都市近郊野菜として有名になりました。これにより、年間を通して野菜中心の多角経営が行われるようになりました。

注１：寒い時期に加温するなどして、自然の収穫時期より早く花を咲かせたり、収穫したりする栽培方法のこと（ハウス栽培も一手法）

(4)　昭和の終盤から平成中期

農地（主に水田）が減ったことで、さらに野菜中心の多角経営が進み土地を集約的に利用するようになりました。また、近くの工場で働いて副収入を得て生活をする兼業農家がでてきました。

表１に、昭和の終わり頃から平成の中頃にかけての農地の転用状況を示しました。住宅用地とその他建設施設用地への転用面積が広く、鉱工業用地への転用面積は平成に入って減少しています。

表 1. 農地転用の状況

単位：面積 a

| 年 | 転用された農地の総数 | | 住宅用地 | | 鉱工業用地 | | 道水路鉄道用地 | | その他建設施設用地 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 件数 | 面積 | 件数 | 面積 | 件数 | 面積 | 件数 | 面積 | 件数 | 面積 |
| 昭和 59 | 535 | 1,750 | 394 | 1,146 | 4 | 65 | 41 | 49 | 92 | 591 |
| 昭和 61 | 776 | 3,051 | 525 | 1,359 | 11 | 65 | 78 | 81 | 140 | 1,096 |
| 昭和 63 | 627 | 2,773 | 399 | 1,163 | 12 | 72 | 64 | 74 | 152 | 1,464 |
| 平成 2 | 623 | 3,134 | 376 | 1,090 | 13 | 104 | 65 | 132 | 169 | 1,808 |
| 平成 4 | 722 | 3,713 | 424 | 1,643 | 7 | 81 | 49 | 46 | 242 | 1,943 |
| 平成 6 | 632 | 3,139 | 410 | 1,623 | - | - | 42 | 36 | 166 | 1,348 |
| 平成 8 | 560 | 2,550 | 353 | 1,200 | 2 | 4 | 50 | 40 | 148 | 1,099 |
| 平成 10 | 499 | 2,447 | 289 | 955 | - | - | 51 | 78 | 131 | 1,137 |

農業委員会事務局（郷土かしわ）

## 3.　柏市の農業の特徴

平成 30（2018）年の全国都道府県別の農業産出額は 1 位：北海道（12,593 億円）、2 位：鹿児島県（4,863 億円）、3 位：茨城県（4,508 億円）、4 位：千葉県（4,259 億円）となっており、千葉県は全国有数の農業県といえます。そこで、農業県である千葉県の中にある柏市がどのような農業の特徴を有しているのか、資料を基に紐解いていきます。

### (1)　多様化してきた柏市の農業

昭和 27（1952）年頃から始まったビニルハウスを活用した農業（施設栽培）が日本全国で増え始めます。柏市でも昭和 40 年代の初めをピークに農家戸数が減りましたが、ビニルハウス面積は増えていきました。また、柏市豊四季では中国野菜[注2]が栽培され始めました。近年では、宅地化の進行とマイホームの増加に伴った農業として、切り花・鉢物・観葉植物・庭園樹木の栽培が増えてきました。このほか、都市化した生活の中から自然志向ニーズに応え、イチゴ、ブドウ、ナシ、サツマイモなどの観光農業も増えてきました。

以上のような農業の変遷は、いずれも人口の増加と都市化した柏市の特色に敏感に反応した農業経営といえます。

そして、これまでこれらの農産物は、各地区の農業協同組合や民間の出荷業者を通じて、県内外の各地へトラックにより出荷されていました。その後、昭和 46（1971）年、柏市自体が商業都市化するにつれて市内での取引を円滑に行うために、国道 16 号線沿いに公設の総合地方卸売市場が開設されることによって、農作物が柏市内だけで流通させる仕組みができてきました。

注 2：中国から導入された野菜（チンゲンサイ、タアサイなど）のこと

### (2)　兼業農家の増加と離農の進行

一般に農家は、専業農家から第 1 種兼業農家[注3]・第 2 種兼業農家[注4]への移行(第 1 段階)、第 2 種兼業農家の増加(第 2 段階)、すべての農家の減少(第 3 段階)と 3 つの段階を経て減少していきます。図 1 で見ると柏市は、昭和 35（1960）年までが第 1 段階であり、昭和 45（1970）年までが第 2 段階、それ以降は第 3 段階となります。また、全農家戸数自体は、昭和 35（1960）年をピー

クに年々減少し続け、それと連動して農家が経営する耕地面積も減少していきました。昭和 35（1960）年から昭和 50（1975）年までは、田畑の耕地面積に大きな減少が見られましたが、昭和 50（1975）年以降は大きな減少は見られないものの、田畑の休耕地の面積が目立つようになってきました。一方、田畑の耕地面積の減少とは逆に、樹園地の耕地面積は観光農業での需要も加わり徐々に増加していることがわかります。

柏市内の農家が減った理由として、1 時間ほどで東京に通勤できるため宅地が増加し市街地整備計画で農地が減ったこと、柏市の商・工業が発展し農業以上の収入が得られる職ができたことなどがあげられます。このように、柏市の農業をみると、消費生活水準の向上により自給的な農家が減少していく過程を見ることができます。

注 3：農業を主とする兼業農家

注 4：農業以外の仕事を主とする兼業農家

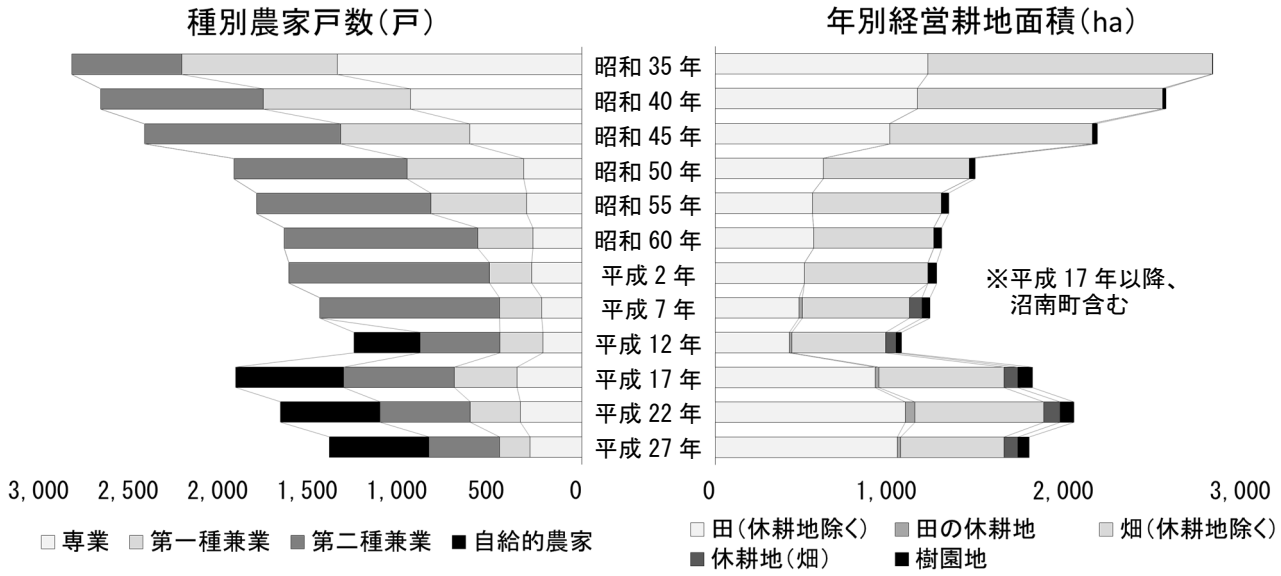



図 1. 柏市の農家戸数と経営耕地

農業基本調査結果報告書
農林業センサス結果報告書（昭和 55 年・平成 2 年、12 年、17 年、22 年、27 年調査）
農業センサス結果報告書（昭和 60 年・平成 7 年調査）

表２のとおり、柏市の昭和と平成の農家人口を比べると、昭和 30（1955）年では総人口の 36.8%を農家人口が占めていたのに対し、平成 27（2015）年は総人口の約 0.8%にまで減少しました。同様に、昭和と平成における柏市の農家戸数は、昭和 30（1955）年では総世帯数の 31.9%を占めていたのに対し、平成 27（2015）年は総世帯数の約 0.8%にまで減少しています。

また、農家人口は、昭和 35（1960）年の 18,082 人をピークに、調査最新年の平成 27 年まで減り続けています。

表 2. 農家人口・農家戸数（平成 17 年以降、沼南町含む）

| 項目＼年次 | | 昭和30 | 35 | 40 | 45 | 50 | 55 | 60 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 総人口（A） | | 45,020 | 63,745 | 109,237 | 150,635 | 203,065 | 239,198 | 273,128 |
| 農家人口（B） | | 16,565 | 18,082 | 16,154 | 13,714 | 10,690 | 9,550 | 8,539 |
| （B／A）（%） | | 36.8 | 28.4 | 14.8 | 9.1 | 5.3 | 4.0 | 3.1 |
| 総世帯数（C） | | 8,586 | 13,673 | 27,746 | 40,216 | 57,445 | 73,172 | 84,271 |
| 農家戸数（D） | | 2,743 | 2,846 | 2,686 | 2,442 | 1,972 | 1,815 | 1,661 |
| （D／C）（%） | | 31.9 | 20.8 | 9.7 | 6.1 | 3.4 | 2.5 | 2.0 |
| １戸当 | （A／C） | 5.2 | 4.7 | 3.9 | 3.7 | 3.5 | 3.3 | 3.2 |
| 人数 | （B／D） | 6.0 | 6.4 | 6.0 | 5.6 | 5.4 | 5.3 | 5.1 |

| 項目＼年次 | | 平成2 | 7 | 12 | 17 | 22 | 27 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 総人口（A） | | 305,058 | 317,750 | 327,851 | 380,963 | 404,012 | 413,954 |
| 農家人口（B） | | 8,179 | 7,168 | 6,094 | 8,627 | 4,962 | 3,441 |
| （B／A）（%） | | 2.7 | 2.3 | 1.9 | 2.3 | 1.2 | 0.8 |
| 総世帯数（C） | | 100,398 | 111,129 | 121,221 | 144,013 | 162,287 | 175,691 |
| 農家戸数（D） | | 1,635 | 1,463 | 1,271 | 1,932 | 1,682 | 1,410 |
| （D／C）（%） | | 1.6 | 1.3 | 1.0 | 1.3 | 1.0 | 0.8 |
| １戸当 | （A／C） | 3.0 | 2.9 | 2.7 | 2.6 | 2.5 | 2.4 |
| 人数 | （B／D） | 5.0 | 4.9 | 4.8 | 4.5 | 3.0 | 1.7 |

Ａ、Ｃ：国勢調査結果報告書（各年 10 月 1 日現在）
Ｂ、Ｄ：昭和 30 年は昭和 35 年柏市勢要覧、昭和 35～平成 7 年は農業基本調査、
平成 12～27 年は柏市統計書（平成 30 年版）・世界農林業センサス（2 月 1 日）

(3)　収入にみる農家の特色

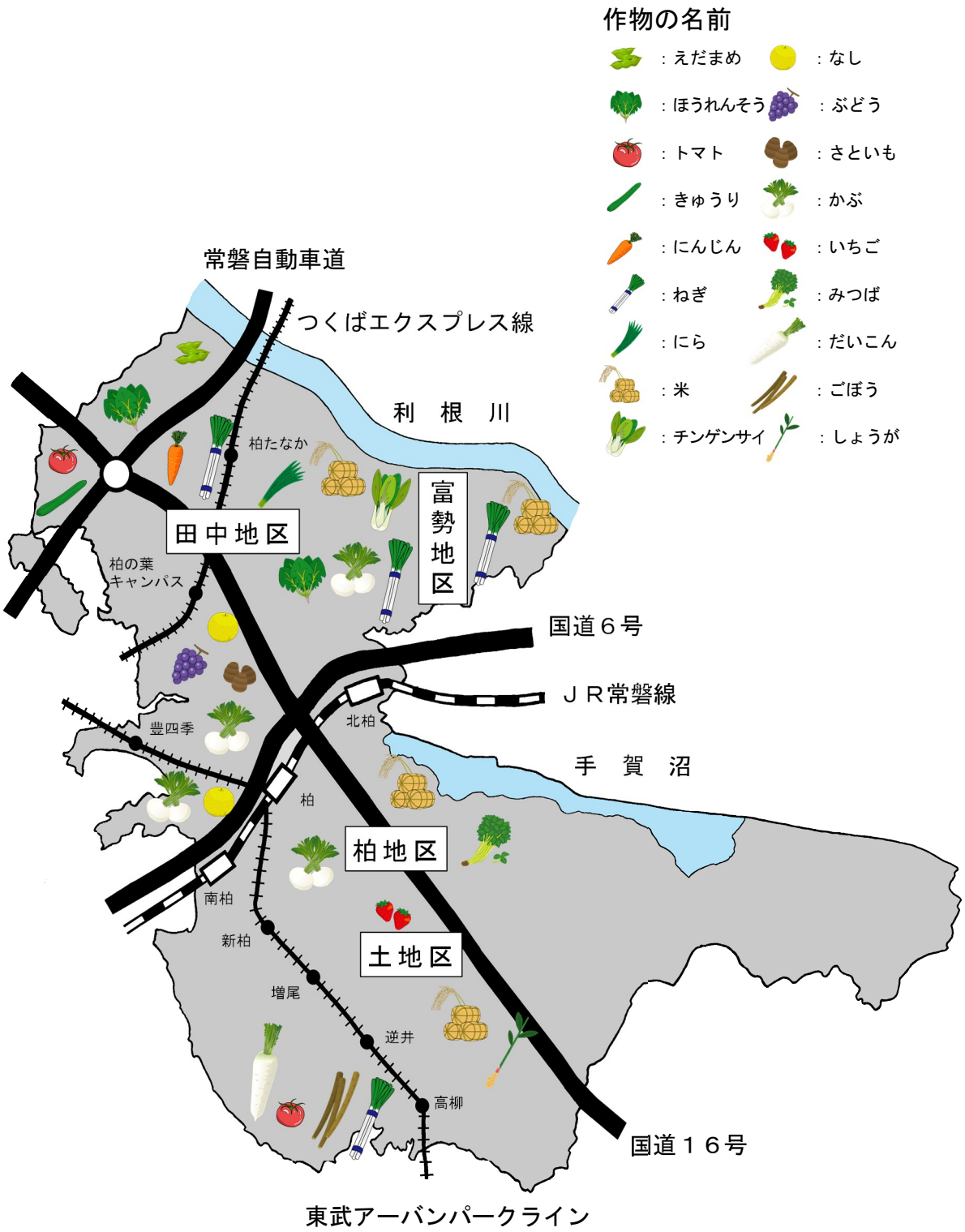
昭和と平成の野菜の品目を比べると、カブ、ネギ、ホウレンソウは調査年のどの年においても上位に位置しています。一方で、平成に入ってから出現した野菜としてトマトがあげられます。表 3 では、平成 9（1997）年の野菜のうち、上位 3 品目のカブ、ネギ、ホウレンソウで生産額の約 58%を占めていることがわかります。このことから、都市近郊農業地域としての柏市の特色を表していることがうかがえます。

農家としては、野菜類は販売価格が不安定であることが大きな悩みです。加えて、都市化の問題から土地を手放す農家がいる反面、消費者の好みに合わせて経営を多角化させるなどの工夫をすることで多くの収入を得ている農家もいます。

表 3. 農業粗生産額年別作物比率

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和62年 | かぶ | ねぎ | 米 | ほうれんそう | きゅうり | その他 | 計（百万） |
| | 1,190 (20.1%) | 1,127 (19.0%) | 717 (12.0%) | 689 (11.6%) | 278 (4.7%) | 1,928 (32.5%) | 5,929 |
| 平成元年 | ねぎ | かぶ | 米 | ほうれんそう | きゅうり | その他 | 計（百万） |
| | 1,855 (27.0%) | 1,174 (17.1%) | 741 (10.8%) | 694 (10.1%) | 321 (4.7%) | 2,074 (30.3%) | 6,859 |
| 平成3年 | かぶ | ほうれんそう | ねぎ | 米 | トマト | その他 | 計（百万） |
| | 1,720 (22.1%) | 1,334 (17.2%) | 1,249 (16.1%) | 704 (9.1%) | 381 (4.9%) | 2,381 (30.6%) | 7,769 |
| 平成5年 | ねぎ | かぶ | ほうれんそう | 米 | トマト | その他 | 計（百万） |
| | 1,572 (21.1%) | 1,553 (20.9%) | 982 (13.2%) | 741 (10.0%) | 316 (4.2%) | 2,274 (30.6%) | 7,438 |
| 平成7年 | かぶ | ねぎ | ほうれんそう | 米 | トマト | その他 | 計（百万） |
| | 1,907 (26.4%) | 1,085 (15.1%) | 1,037 (14.4%) | 750 (10.4%) | 347 (4.8%) | 2,077 (28.8%) | 7,203 |
| 平成9年 | かぶ | ねぎ | ほうれんそう | 米 | トマト | その他 | 計（百万） |
| | 1,637 (24.5%) | 1,311 (19.6%) | 922 (13.8%) | 719 (10.7%) | 313 (4.6%) | 1,762 (26.8%) | 6,664 |

「郷土 かしわ〔地理・歴史編〕」柏市教育委員会　平成 12 年度版




（農政課）

図 3.　柏市の主な農作物と産地

「郷土 かしわ〔地理・歴史編〕」柏市教育委員会　平成 12 年度版

### (4)　都市近郊農業としての特徴

東葛地域の自治体と比較しながら、現在の柏市の農業の特徴を見ていきます。表４に東葛地域の自治体の耕地面積と農業産出額を示しました。柏市の耕地面積は野田市に次いで広く、農業産出額は船橋市に次いで高い金額となっています。また販売農家一戸当たりの耕地面積が最も広く、東葛地域の自治体の中では農業が盛んな自治体の１つといえます。

表 4. 東葛地域の耕地面積と農業産出額

（浦安市には農地がないため、グラフの区分には含めない）

| 区分 | H29耕地面積（ha） | 市面積に対する耕地面積(%) | 販売農家一戸当たりの耕地面積(ha) | H28農業産出額（億円） | 耕地面積1ha当たりの農業産出額(万円/ha) |
|---|---|---|---|---|---|
| **柏市** | **2,580** | **22.5** | **1.82** | **103.4** | **401** |
| 市川市 | 532 | 9.3 | 1.07 | 42.6 | 801 |
| 船橋市 | 1,230 | 14.4 | 1.24 | 103.5 | 841 |
| 野田市 | 2,640 | 25.5 | 1.41 | 75.7 | 287 |
| 松戸市 | 740 | 12.1 | 1.03 | 64.4 | 870 |
| 流山市 | 423 | 12.0 | 0.96 | 22.9 | 541 |
| 我孫子市 | 1,240 | 28.7 | 1.78 | 23.2 | 187 |
| 鎌ヶ谷市 | 449 | 21.3 | 1.20 | 40.6 | 904 |

松戸市都市農業振興計画

耕地面積：平成 29 年耕地面積統計
販売農家：経営耕地面積が 30a 以上の農業を営む世帯または、農産物販売金額が年間 50 万円以上ある世帯
農業生産額：平成 28 年市町村別農業生産額（推計）

柏市と東葛地域の自治体における農業産出額の内訳を表５に示しました。野菜の割合が 50%以上の自治体は柏市、船橋市、松戸市、流山市で、果実の割合が 50%以上の自治体が市川市と鎌ヶ谷市です。野菜、果実の割合が高いことが都市近郊農業の特徴であるといわれています。コメの割合が高い我孫子市と、畜産の割合が高い野田市は、先述した自治体とは農業産出額の内訳が異なっています。

表 5.　東葛地域の自治体の農業産出額の内訳

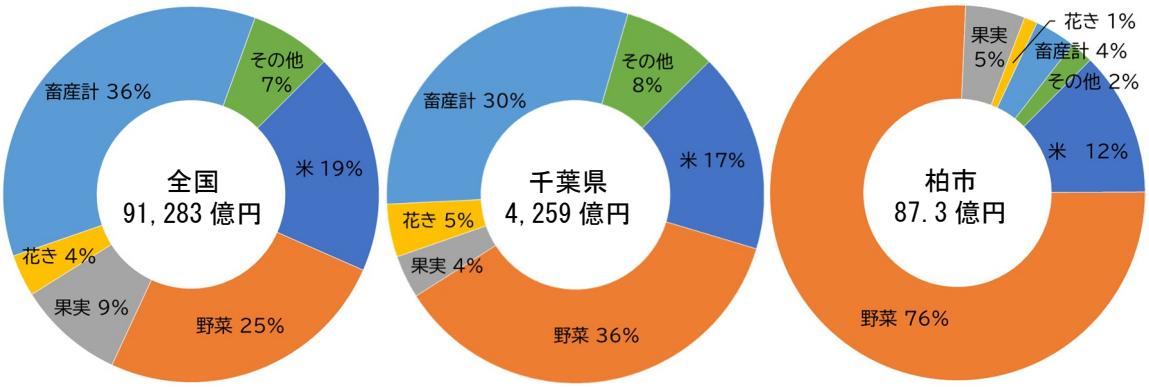
| 区分 | 米（%） | 野菜（%） | 果実（%） | 畜産（%） | その他（%） | 合計（千万円） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| **柏市** | **12** | **76** | **5** | **4** | **3** | **873** |
| 市川市 | 0 | 28 | 68 | 0 | 5 | 351 |
| 船橋市 | 1 | 64 | 20 | 11 | 3 | 840 |
| 野田市 | 16 | 48 | 1 | 30 | 4 | 646 |
| 松戸市 | 1 | 82 | 11 | 0 | 6 | 528 |
| 流山市 | 8 | 86 | 3 | 0 | 3 | 185 |
| 我孫子市 | 46 | 48 | 1 | 1 | 3 | 209 |
| 鎌ヶ谷市 | 0 | 35 | 59 | 3 | 3 | 322 |

市町村の姿　グラフと統計でみる農林水産業

図 4 に全国、千葉県、そして柏市の農業産出額の内訳を示しました。全国と千葉県はどちらも野菜と畜産の割合が高くその合計が 60%以上で、次いでコメの順となっており、似た傾向を示しています。一方で柏市では、野菜の割合が 70%以上と高く、畜産の割合が低くいことから都市近郊農業の特色が出ているといえます。

ちなみに、柏市の農業産出額は全国の 0.1%、千葉県の 2%で、千葉県の中で柏市は、農業の盛んな自治体でないことがわかります。

図 4.　全国、千葉県、柏市の農業産出額の内訳




市町村の姿　グラフと統計でみる農林水産業

参考文献

「郷土 かしわ〔地理・歴史編〕」柏市教育委員会　平成 12 年度版

農業基本調査結果報告書

農林業センサス結果報告書（昭和 55 年・平成 2 年、12 年、17 年、22 年、27 年調査）

農業センサス結果報告書（昭和 60 年・平成 7 年調査）

国勢調査結果報告書

昭和 35 年柏市勢要覧

柏市統計書（平成 30 年版）

松戸市都市農業振興計画. 2020 年 7 月確認.
https://www.city.matsudo.chiba.jp/jigyosya/nougyou/matudositosinougyou.html

市町村の姿　グラフと統計でみる農林水産業. 農林水産省. 2020 年 7 月確認.
http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/12/217/index.html

## Ⅱ　柏市の農業　トピックス

### 1.　概要

本章では、柏市の特産農産物について 6 つ取り上げました。豊四季で明治時代に 3 年間だけ栽培されたサトウキビ、今も昔も柏の特産品であるカブ、大正～昭和時代に人気を博した十余二のサツマイモ、柏市の主力野菜であるネギとホウレンソウ、そして、柏市のみで栽培されている根芋について、まとめています。

### 2.　柏市の農業－特産農作物紹介－

柏市とその周辺の地域には、13 カ所の数字にちなんだ地名が存在します(初富(はつとみ)、二和(ふたわ)、三咲(みさき)、豊四季(とよしき)、五香(ごこう)、六実(むつみ)、七栄(ななえ)、八街(やちまた)、九美上(くみあげ)、十倉(とくら)、十余一(とよいち)、十余二(とよふた)、十余三(とよみ))。これらの地名は、明治 2(1868)年に三井八郎右衛門が設立し、市岡晋一郎が指揮した「小金牧の開墾会社」が開墾した順番に由来しています[1]。このうち、柏市で見られる地名は、4 番目に開墾されて出来た「豊四季」と 12 番目に開墾されて出来た「十余二」の 2 つです。

明治初期の柏市域の村々では、主に米、麦、雑穀などの食用作物が生産されており、工芸作物としては藍などの染料作物や菜種などの油料作物が少々生産されていたのみでした[1]。しかし、小金牧の開墾により出来た豊四季村と十余二村では、工芸作物の導入が盛んに図られ、豊四季村ではサトウキビが、十余二村ではサツマイモが生産されました[1]。また、豊四季村では、明治時代に福神漬け用のカブの生産が始まり、現在もなお柏市の特産品として栽培され続けています。

ここからは、「豊四季のサトウキビとカブ」、「十余二のサツマイモ」、「現在の柏市の主要農産物」、「柏市でしか栽培されていない野菜」を紹介していきます。

## (1)　豊四季のサトウキビとカブ

### ①　豊四季のサトウキビ[1]

・　サトウキビ（*Saccharum officinarum*）[2]
　　イネ科サトウキビ属
　　高さ：3～6m
　　原産：ニューギニア(太茎種)、インド(細茎種)

明治 14(1881)年に、小金牧の開墾を請け負っていた三井組は、現在の十余二の皇大神宮付近に、「十余二村製糖会社」を設立しました。十余二村製糖会社は、砂糖の原料となるサトウキビを豊四季村の農民に生産してもらい、そのサトウキビを買い取ろうと考えました。

しかし、明治 17(1884)年に、わずか 3 年で十余二村製糖会社は解散することとなってしまいました。一体何故解散にいたってしまったのでしょうか。

【原因１：豊四季村の気候がサトウキビの栽培に向いていなかったため】

現在の日本におけるサトウキビの主要産地は、九州及び沖縄といった亜熱帯地域です。柏市(豊四季村)は温帯地域に属しており、サトウキビを栽培するには不適な環境と言えます。また、小金牧の開墾に携わった方々のご子孫のお話にもあったように、開墾当初の柏市は現在よりも気温が低かったため、サトウキビの栽培はさらに困難な状況であったと推測されます。

現在であれば、施設栽培(ビニルハウスなどの施設内で植物を栽培すること)を行うことや、暖房や寒冷紗(病害虫防除、遮光、防寒目的で、施設内部を覆うように設置したり、トンネルに使用したりするポリエステル性の資材)を設置することができますが、19 世紀後半の日本では不可能な技術です。

そのため、サトウキビを導入・栽培しようとしても、サトウキビの栽培に不適な環境である豊四季村では、サトウキビの生産量を伸ばすことができなかったと考えられます。

【原因２：豊四季村の農民がサトウキビの栽培技術を持っていなかったため】

サトウキビは、小金牧の開墾によって豊四季村に導入された作物です。したがって、豊四季村にはサトウキビの栽培技術を持った農民は存在しなかったと言えるでしょう。サトウキビの栽培技術を持たない上に、サトウキビ栽培に不適な環境であることで、豊四季村の農民は非常に苦労を強いられたのではないかと考えられます。

【原因３：明治 16(1883)年の天候不順による不作のため】

明治 16(1883)年に天候不順があったとされ、サトウキビ栽培は打撃を受けたと言われています。明治 14(1881)年に豊四季村でサトウキビ栽培が始まり、収量が伸び悩んでいる中でのこの天候不順は、十余二村製糖会社の解散の大きな要因となったと考えられます。

【原因４：サトウキビが低収量・低品質で、砂糖の製造量が少なかったため】

原因１～原因３より、豊四季村のサトウキビの生産量は伸び悩み、品質も粗悪なものであったと考えられます。サトウキビの生産量が少なかったため、砂糖の製造量も必然的に少なくなり、十余二村製糖会社の経済状況が苦しくなりました。

豊四季村のサトウキビの生産量が少なかったため、需要に対する供給が足りず、豊四季村の農民に支払う費用が増加したことも重なり、十余二村製糖会社は解散してしまいました。豊四季村では、十余二村製糖会社の解散に伴ってサトウキビ栽培を断念し、それ以降サトウキビは栽培されていません。また、小金牧の開墾によってできた村々では、サトウキビ以外にも様々な工芸作物の導入が図られたのですが、柏市には定着せず、現在は栽培されていません。

② 豊四季のカブ

・ カブ（*Brassica rapa*）[3]
アブラナ科アブラナ属
原産：アジア（アフガニスタン）とヨーロッパ（地中海）の両方
または、ヨーロッパ（地中海）のみのどちらかとされる

千葉県は、平成 29（2017）年農業産出額の都道府県別ランキングで 4 位に入っています[4]。では、千葉県が収穫量全国トップを誇る農産物をご存知でしょうか。

【千葉県が収穫量全国１位を誇る農産物（平成 28（2016）年）】[5,6,7]
野菜：ダイコン、カブ、サトイモ、ホウレンソウ、ミツバ、シュンギク、ネギ、サヤインゲン、ソラマメ、エダマメ
作物：ラッカセイ
果樹：日本ナシ

この中で、カブは柏市の農業について語る上で外すことができません。カブは柏市を代表する野菜の１つであり、柏の３大野菜（カブ・ネギ・ホウレンソウ）にも含まれます。柏市におけるカブの生産量は、全国で第１位です。中でも、豊四季での栽培が盛んに行われています。では、豊四季でのカブの栽培は何時頃から始まったのでしょうか。

豊四季のカブの栽培の歴史は、明治時代までさかのぼります。豊四季村は、東京府金町（現在の東京都葛飾区）から注文を受けて、福神漬け用の小カブを委託栽培し始めました。これが現在まで続く豊四季のカブ栽培の始まりです[1]。

小金牧の開墾に携わった方々のご子孫によると、「豊四季村の土は黒く、地力があったため、葉菜（カブ）の栽培に向いていたが、十余二村の土は赤土で痩せていて、サラサラしていたため、根菜（サツマイモ）しか栽培できなかった」そうで、同じ柏市域でもカブの栽培に適した豊四季村を選び、栽培し始めたと考えられます。

大正 10(1921)年になると、恩田藤太郎が本格的なカブの栽培を始めたとされています[1]。また、東京府のカブ農家が水害に遭い、カブの出荷が出来なくなった際に、豊四季の 2、3 戸の契約農家が千住市場にカブを出荷したところ収益が得られたため、関東大震災以降、本格的に栽培が行われるようになったとも言われています[1]。したがって、明治時代に栽培が始まった豊四季村のカブは、大正時代になって本格的な栽培が始まったと考えられます。

昭和 10(1935)年には、「豊四季第一出荷組合」が設立され、豊四季のカブの出荷が組織的に行われるようになりました[1]。現在は、「JA ちば東葛柏小かぶ共撰部会」の方々が、豊四季を含む柏市のカブを生産・出荷しています[8]。

柏市では、主に小カブの秋播き栽培を行っていました。なぜならば、小カブは冷涼な気候を好んでおり、夏の高温では病虫害被害が大きくなり、冬の低温ではカブが生育不良を起こしてしまう可能性があり、春は抽苔(高温・長日条件で花芽が分化し、花茎が伸長してしまう現象)してしまう可能性があるためです[9]。

しかし、栽培技術の研究や品種改良の結果、近年は 8 月以外のほぼ 1 年中の生産・出荷が可能となっています[9]。この周年生産技術の研究や産地育成の功績が認められたことにより、平成元(1989)年に「JA ちば東葛柏小かぶ研究会」は「朝日農業賞」を受賞しました[9]。

### (2)　十余二のサツマイモ

・　サツマイモ（*Ipomoea batatas*）[10]
　　ヒルガオ科サツマイモ属
　　原産：中南米の熱帯・亜熱帯地域

サツマイモは、1492 年にコロンブスがスペインに持ち帰って以降、世界各地に伝わったと言われています[10]。日本へは 1597 年に福建省から宮古島へ入り、1605 年には、野国(ぬぐん)総管により琉球(沖縄)に伝わりました[10]。その後九州、全国に伝わり、17～18 世紀に入ると青木昆陽により普及が行われ、救荒作物として多くの人の命を救いました[10]。

大正時代になると、豊四季村と十余二村でもサツマイモの栽培が盛んに行わ

れるようになりました[1]。小金牧の開墾に携わった方々のご子孫の話によると、十余二村では、サツマイモの方が麦や陸稲よりも大きな収入源となったそうです。大正元(1912)年に「十余二甘藷組合」が設立され、大正3(1914)年には「十余二甘藷耕作組合」に改称し、サツマイモの栽培方法や出荷方法の改善に取り組んだとされています[1]。また、十余二村で最初にサツマイモの栽培をした人物は山口富蔵と言われています[1]。

現在のサツマイモの利用方法としては、我々が食用とする「食用作物」としての利用、家畜が食用とする「飼料作物」としての利用、デンプンを使用する「工芸作物」としての利用が挙げられます。しかし、「十余二甘藷組合」が設立された頃に十余二村で栽培していたサツマイモは、デンプンを使用するには向かない非常に甘いイモであったと言われています[1]。十余二村で栽培されたサツマイモは、東京市内で焼き芋にして食されました。

十余二村のサツマイモは、当時サツマイモの主要産地であった埼玉県川越産のサツマイモよりも人気があり、「十余二赤」と呼ばれるブランド名で親しまれました。この十余二赤の選抜には、石塚忠蔵氏(小金牧の開墾に携わった方のご子孫で、お話を伺った石塚とみさんのご先祖)が携わったとされています。石塚忠蔵氏は千葉県農事試験場から委託されて、昭和16(1941)年～昭和26(1951)年の間、サツマイモの品種比較試験を行い、試験設計書などの当時の栽培状況が分かる詳しい資料を残しています。

また、小金牧の開墾に携わった方々のご子孫から、「十余二赤」は後に名称が「千葉紅」とされたと伺いました。千葉紅は「紅赤」と呼ばれる品種を千葉県で栽培した際に付けられる名称と言われています。千葉紅は栽培が難しいとされており、収量が得られなかったため戦中・戦後の食糧増産の陰に隠れ、徐々に生産されなくなってしまったと考えられます。そのため、現在十余二赤や千葉紅といった品種のサツマイモは存在していません。

大正・昭和時代のサツマイモの栽培の流れ
（小金牧の開墾に携わった方々のご子孫の話）
種芋で苗床を作る→露地で栽培→収穫→洗浄→出荷→種芋を消毒→種芋を牟呂で保存
肥料：落ち葉の堆肥、単肥
利用：焼き芋用（東京市へトラックで輸送）、「マンジョウみりん（キッコーマン）」の原料となる焼酎用、献上用（皇族の北白川宮家へ献上）

(3)　現在の柏市の主要農産物

先にも述べたように、柏の 3 大野菜はカブ・ネギ・ホウレンソウです。カブは、柏市豊四季において、明治時代から栽培されており、カブの生産量は全国１位です。では、ネギについても見ていきましょう。

①　ネギ

・　ネギ（*Allium fistulosum*）[3]
　ヒガンバナ科ネギ属
　原産：中国北西部、モンゴル、シベリア南部とされる

柏市では、根深ネギと葉ネギのうち、主に根深ネギを栽培しています。特に柏市が含まれる東葛飾地区では、「坊主不知ネギ」が栽培されています。

東葛飾地域では、江戸時代からネギ栽培を始めたとされており、中でも「坊主不知ネギ」は、昭和初期に埼玉県から入ったとされています[11]。その後、系統選抜を経て、現在は「向小金」、「小金」、「手賀黒」、「風早黒」系が中心となって栽培されています[11]。

「坊主不知ネギ」の特徴は、名前の通り、春になってもほとんどネギ坊主が出ないことです[11]。ネギ坊主とは、ネギ科の植物に見られる特徴的な花序（花の配列状態を示す言葉）のことで、白色の花が 300～400 個、球状に咲いた状態を指します[3]。3 月下旬～4 月になると、ネギは花茎が伸びてネギ坊主が出てきてし

まい、ネギとしての商品価値が下がってしまい、生産や出荷が困難になってしまいます[3]。しかし、「坊主不知ネギ」は春になってもほとんどネギ坊主が出ないことで、冬ネギと夏ネギの端境期に生産・出荷が可能となります[11]。そのため、5月～6月に入手可能となります[11]。これにより、柏市ではネギをほぼ周年出荷することが可能となりました。

平成 20(2008)年に、柏市の江口金男氏は、ネギの周年出荷体系における「坊主不知ネギ」の有効利用技術を確立したとして、農林水産省が選定する「農業技術の匠(地域活性化への貢献が期待できる農業技術を自ら開発・改良した農業者)」に選ばれました[12]。

(4)　柏市でしか栽培されていない野菜－根芋－

皆様は「根芋(ねいも)」という野菜をご存知でしょうか。根芋は、サトイモの新芽を軟白栽培してできた野菜です[13]。現在は柏市の４戸の生産農家の方のみによって栽培されており、柏市内でもなかなか見かけることができません[14]。ここでは、その根芋の特徴的な栽培方法についてご紹介します。

・　サトイモ(*Colocasia esculenta* (L.) Schott)[3]
　　サトイモ科サトイモ属
　　原産：インドおよびインドシナ半島、または中国とされる

サトイモは、親イモの周りに子イモが、子イモの周りに孫イモがつき、一般的には子イモや孫イモが収穫・出荷されます[3]。

他にも、「ズイキ(葉柄部分)」は生食や乾燥して食すことができ、中でも新芽の若いものは「根芋」として食すことができます[13]。

根芋は、畑に穴を掘り、米ぬかをベースにした堆肥を敷き込み、腰の深さにサトイモの親イモを並べて、籾殻で保温しながら育てていきます[13]。堆肥の発酵によって生じる熱を利用して親イモを発芽させるため、温度の管理が非常に重要です[13]。そのため、籾殻には温度計を指して栽培しています[13]。発芽したサトイモは、米ぬかの中で日光を浴びることなく伸びていくため、根芋は真っ白になります。

収穫する際は、親イモから切り離し、洗浄され、箱詰め後に出荷されます[12]。しかし、根芋の出荷は東京都の市場を中心に行われるため、柏市内ではあまり見かけることができません[13]。

根芋は灰汁があるため、通常の「ズイキ」のように生食することはできません[13]。そのため、加熱するか酢漬けにして灰汁抜きしてから調理されます[13]。

根芋の出荷は 10 月下旬から 6 月、2 月～3 月が旬となっていますので、根芋を見かけた際は、是非一度食べてみてください[13]。

【参考文献】

[1] 柏市史編さん委員会　『歴史ガイドかしわ』
（柏市教育委員会、2007 年 3 月 31 日発行）

[2] 巽二郎、堀江武、石井龍一、稲永忍、伊東睦泰、石井康之、藤本文弘
『作物学（Ⅱ）－工芸・飼料作物編－』
（文永堂出版株式会社、2000 年 11 月 30 日初版第 1 刷、2006 年 3 月 10 日初版第 2 刷発行）

[3] 金浜耕基　『野菜園芸学』
（文永堂出版株式会社、2007 年 9 月 30 日初版第 1 刷発行）

[4] 農林水産省 HP　「農林水産統計」
（農林水産省大臣官房統計部、平成 30 年 12 月 25 日公表）
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/attach/pdf/index-6.pdf

[5] 農林水産省 HP
「作物統計調査 作況調査(野菜) 確報 平成 29 年産野菜生産出荷統計」
（農林水産省生産流通消費統計課、2018 年 11 月 12 日公開）
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_yasai/index.html

[6] 農林水産省 HP
「作物統計調査 作況調査(果樹) 確報 平成 29 年産果樹生産出荷統計」
（農林水産省生産流通消費統計課、2018 年 11 月 1 日公開）
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kazyu/index.html

[7] 農林水産省 HP
「作物統計調査 作況調査(水陸稲、麦類、豆類、かんしょ、飼料作物、工芸農作物) 確報 平成 29 年産作物統計（普通作物・飼料作物・工芸農作物)」
（農林水産省生産流通消費統計課、2018 年 6 月 27 日公表）
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kome/index.html

[8] JA ちば東葛柏小かぶ共撰部会 HP
http://www.ja-chibatoukatsu.jp/index.htm

[9] 千葉県 HP　「教えてちばの恵み かぶ｜旬鮮図鑑」
（農林水産部流通販売課 販売・輸出促進室、2019 年 2 月 14 日更新）
https://www.pref.chiba.lg.jp/ryuhan/pbmgm/zukan/yasai/kabu.html

[10] 秋田重誠、吉田智彦、窪田文武、俣野敏子、国分牧衛、石井龍一、今井勝、岩間和人 『作物学（Ⅰ） －食用作物編－』
（文永堂出版株式会社、2000 年 8 月 10 日初版第 1 刷発行、2010 年 3 月 20 日初版第 6 刷発行）

[11] 千葉県 HP　「教えてちばの恵み ねぎ｜旬鮮図鑑」
（農林水産部流通販売課 販売・輸出促進室、2019 年 2 月 14 日更新）
http://www.pref.chiba.lg.jp/ryuhan/pbmgm/zukan/yasai/negi.html

[12] 農林水産省 HP
「「農業技術の匠」：江口金男さん ～ねぎの周年出荷体系における「坊主不知ねぎ」の有効利用技術～」
http://www.maff.go.jp/j/seisan/gizyutu/hukyu/h_takumi/attach/pdf/170929-35.pdf

[13] 柏市 HP　「全国でも柏市でしか栽培されていない野菜、根芋（ねいも）」
（柏人への道（農ｘ食ｘ人）、2014 年 1 月 28 日更新）
http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/bloghakunchu2/p017555.html

[14] 柏市 HP　「根芋が日本テレビ news every に取り上げられました！」
（柏人への道（農ｘ食ｘ人）、2017 年 2 月 28 日更新）
http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/bloghakunchu2/p040157.html

## 柏市とその周辺の歴史年表

※本年表は「郷土かしわ」の歴史年表をベースとし、末尾欄外に示す引用・参考文献より重要と思われる「できごと」を補足した。

| 時代区分 | | 西暦 | 年号 | 主なできごと |
|---|---|---|---|---|
| 原始 | 旧石器時代 | 約4万年前<br>約3万年前 | | ***・日本列島に最古の明確な石器が出現***<br>・常磐自動車道柏地区に旧石器時代の遺跡が現れる<br>（聖人塚，中山新田，元割遺跡など）<br>・環状ブロックの形成　（中山新田Ⅰ遺跡）<br>・長期間の人々の営み　（聖人塚遺跡）<br>・本の木型石槍の生産　（元割遺跡） |
| | 縄文時代 | 約1万5千年前 | 草創期<br>早期<br>前期<br>中期<br>後期<br>晩期 | ***・土器の使用が始まる***<br>***・狩猟や採集の生活が続く***<br>・本格的なムラがつくられ始まる（鴻ノ巣，花前遺跡）<br>・前期前葉の黒浜式期の集落が出現（若葉台遺跡，花前Ⅰ遺跡）<br>・貝塚を中心に大集落ができる（布施貝塚，林台遺跡）<br>・中期前葉の阿玉台式期の集落が展開（聖人塚遺跡,中山新田Ⅰ・Ⅱ遺跡，水砂遺跡）<br>・中期中葉～後葉の環状集落（小山台遺跡）<br>・中島遺跡，岩井貝塚<br>・宮根遺跡 |
| 古代 | 弥生時代 | 前10世紀後半～前8・7世紀<br>紀元後<br>239 | | ***・大陸から北九州に稲作が伝わる***<br>***・大陸から青銅器，鉄器が伝わる***<br>(今のところ柏市内では弥生時代 早・前・中期を示す明確なものは発見されていない)<br>***・邪馬台国の女王卑弥呼が倭国王になる***<br>・笹原，中馬場遺跡（弥生後期） |
| | 古墳時代 | 538<br>593<br>607<br>645<br>646<br>701 | 大化元<br>大化2<br>大宝元 | ***・前方後円墳がつくられる（大王が支配する大和政権）***<br>・戸張一番割，戸張城山，石揚遺跡（古墳前期）<br>・北ノ作1号・2号墳<br>・弁天古墳（古墳・中期）<br>・花野井大塚古墳<br>・小規模な集落が出現　（花前Ⅱ-1遺跡，矢船遺跡）<br>・集落規模の拡大（上貝塚遺跡）<br>***・百済から仏教伝わる***<br>***・聖徳太子が推古天皇の摂政になる***<br>・柏・我孫子あたりは朝廷の御名代（みなしろ）として直接支配される<br>***・小野妹子を遣隋使として隋に送る***<br>・市内各所に小円墳がたくさんつくられる<br>・総の国を二分して南部を上総，北部を下総とした<br>***・大化改新の詔が発布される***<br>***・大宝律令ができる***<br>・下総国府（市川市国府台）置かれる<br>・根戸周辺に大集落ができるようになる（中馬場遺跡） |
| | 飛鳥時代 | | | |
| | 奈良時代 | 710<br>721<br>741<br>771 | 和銅3<br>養老5<br>天平13<br>宝亀2 | ***・平城京（奈良）に遷都***<br>・この頃鉄器生産を伴う集落の出現（花前Ⅰ遺跡，花前Ⅱ－2遺跡）<br>・養老5年「下総国倉麻（そうま）郡意布郷（おふのさと）」戸籍つくられる（ほとんどの人が「藤原部」姓をもつ）<br>***・国分寺建立の詔***<br>・下総国分寺建立<br>・武蔵国-下総国-常陸国（東海道）の交通が多くなり，駅馬が増強される |
| | 平安時代 | 794<br>823<br>935<br>1126<br>1130<br>1156<br>1167 | 延暦13<br>弘仁14<br>承平5<br>大治元<br>大治5<br>保元元<br>仁安2 | ***・平安京（京都）に遷都***<br>・この頃本格的な製鉄の展開（花前Ⅱ－2遺跡）<br>・空海，布施弁財天に紅竜山東海寺を建立（東海寺縁起による）<br>***・平将門反乱をおこす***<br>・相馬御厨成立<br>・平常重，布施郷（相馬御厨）を伊勢皇太神宮領に寄進（志子多谷，手下水海の名みえる）<br>・保元の乱に，千葉介常胤（相馬郡司），源義朝に従って参加<br>***・平清盛が太政大臣となる*** |

| 時代区分 | | | 西暦 | 年号 | 主なできごと |
|---|---|---|---|---|---|
| 古代 | 平安時代 | | 1180 | 治承4 | ・源頼朝伊豆に挙兵<br>千葉一族協力する |
| | | | | | ・千葉介常胤本領安堵（相馬御厨の下司職）を得る |
| | | | 1185 | 文治元 | ・守護，地頭の設置<br>・千葉介常胤「下総一国守護職」に補任 |
| 中世 | 鎌倉時代 | | 1192 | 建久3 | ・源頼朝征夷大将軍に任ぜられ，鎌倉に幕府を開く |
| | | | 1204 | 元久2 | ・相馬次郎師常（常胤の次男）没 |
| | | | 1227 | 嘉禄3 | ・相馬五郎能胤が娘土用（むすめとよ）に相馬御厨内の手加，布瀬，藤心，野木崎らをゆずる |
| | 南北朝時代 | | 1334 | 建武元 | ・建武の新政 |
| | 室町時代 | | 1338 | 延元3 | ・足利尊氏，征夷大将軍となり幕府を開く |
| | | | 1462 | 寛正3 | ・高城胤忠，根木内城構築 |
| | | 戦国時代 | 1467～77 | 応仁元 | ・応仁の乱 |
| | | | 1478 | 文明10 | ・太田道灌，国府台に陣し，千葉孝胤と境根原で戦う |
| | | | 1537 | 天文6 | ・高城胤吉，小金大谷口城構築 |
| | | | 1538 | 天文7 | ・北条軍と小弓軍国府台に戦う<br>北条軍勝利 |
| | | | 1564 | 永禄7 | ・国府台後の戦，里見氏，北条軍に敗れる |
| 近世 | 安土桃山 | | 1573 | 天正元 | ・室町幕府滅ぶ |
| | | | 1590 | 天正18 | ・豊臣秀吉の統一<br>・高城氏滅ぶ |
| | | | 1600 | 慶長5 | ・関ケ原の戦い |
| | 江戸時代 | | 1603 | 慶長8 | ・徳川家康将軍となり江戸に幕府を開く |
| | | | 1614 | 慶長19 | ・江戸幕府，小金三牧と佐倉七牧を管理する |
| | | | 1616 | 元和2 | ・幕府七里ケ渡を定船場とする<br>・本多正重が相馬郡内に1万石を領す |
| | | | 1641 | 寛永18 | ・江戸川開通 |
| | | | 1641～43 | 寛永18～20 | ・寛永の大飢饉 |
| | | | 1654 | 承応3 | ・伊奈備前守忠次，利根川東遷に成功 |
| | | | 1663 | 寛文3 | ・大青田村と船戸村の草場をめぐる争いで双方の名主入牢 |
| | | | 1671 | 寛文11 | ・江戸商人（海野屋作兵衛ら17名）による手賀沼干拓始まる |
| | | | 1702 | 元禄15 | ・大室村と高野村草場をめぐる争いで3人死に，双方の名主入牢 |
| | | | 1708 | 宝永5 | ・戸張村と大井村草場をめぐる争い |
| | | | 1724 | 享保9 | ・利根川沿いに流作場生まれる<br>・布施河岸が正式に成立 |
| | | | 1725 | 享保10 | ・小金原で将軍吉宗鹿狩，村々より勢子，人足差し出す<br>・このころより代官，小宮山杢之進，牧付新田を開発させはじめる |
| | | | 1726 | 享保11 | ・小金原で将軍吉宗鹿狩 |
| | | | 1727 | 享保12 | ・幕府年貢増収をねらって手賀沼干拓を始める |
| | | | 1729 | 享保14 | ・手賀沼開墾により千間堤完成(5年後決壊)<br>・手賀沼干拓竣工 |
| | | | 1732 | 享保17 | ・享保の大飢饉 |
| | | | 1737 | 元文2 | ・藤ヶ谷に鮮魚街道石橋が作られる |
| | | | 1738 | 元文3 | ・千間堤洪水により決壊 |
| | | | 1745 | 延享2 | ・手賀沼再工事竣工<br>・利根川洪水のため千間堤再決壊 |
| | | | 1748 | 寛延元 | ・水戸公，小金原で鹿狩，帰途，弁天で参詣 |
| | | | 1783～87 | 天明3～7 | ・関東一帯大飢饉(天明の大飢饉) |
| | | | 1787 | 天明7 | ・寛政の改革始まる |
| | | | 1790 | 寛政2 | ・船戸・小青田等16ヵ村・水戸公の鷹場の免除を願い出る |
| | | | 1795 | 寛政7 | ・小金原で将軍家斉鹿狩 |
| | | | 1849 | 嘉永2 | ・小金原で将軍家慶鹿狩 |
| | | | 1853 | 嘉永6 | ・黒船渡来で世間騒がしくなり水戸街道の往来がはげしくなる（助郷増加）<br>・非常時（黒船渡来） のため，村々から船戸，藤心詰足軽勤番差し出す<br>・品川沖へ御台場建築のため根戸村御林から木材を江戸へ送る |
| | | | 1855 | 安政2 | ・下総布川の儒医，赤松宗旦「利根川図誌」を著す |
| | | | 1867 | 慶応3 | ・大政奉還 |

| 時代区分 | | 西暦 | 年号 | 主なできごと |
|---|---|---|---|---|
| 近代 | 明治 | 1868 | 明治元 | ・旧領主本多紀伊守，駿河から安房国長尾藩（現南房総市白浜）へ移封 |
| | | 1869 | 明治2 | ・葛飾県の支配となる |
| | | | | ・小金，佐倉牧開墾会社設立，小金・佐倉牧廃止 |
| | | 1871 | 明治4 | ***・廃藩置県*** |
| | | | | ・葛飾県を廃止，印旛県となる |
| | | 1873 | 明治6 | ・下総開墾会社を解散 |
| | | | | ・豊四季村，十余二村誕生 |
| | | 1873 | 明治6 | ・千葉県となる |
| | | 1879 | 明治12 | ・第1回県会議員選挙，成島巍一郎（布施），木村作左衛門（名戸ケ谷）当選する |
| | | | | ・藤ヶ谷に鮮魚街道常夜灯造立 |
| | | 1888 | 明治21 | ・利根運河の工事始まる |
| | | 1889 | 明治22 | ***・大日本帝国憲法発布*** |
| | | | | ***・市町村制施行*** |
| | | | | ・富勢村・土村・田中村・千代田村・手賀村・風早村誕生 |
| | | 1890 | 明治23 | ・利根運河完成 |
| | | 1894 | 明治27 | ***・日清戦争始まる*** |
| | | 1896 | 明治29 | ・常磐線（当時日本鉄道株式会社土浦線），田端～土浦間開通，柏駅開設 |
| | | 1897 | 明治30 | ・成田線開通　（成田－佐倉間開業） |
| | | 1901 | 明治34 | ・成田鉄道（現成田線）我孫子－安食間開通（成田直通は翌年） |
| | | 1904 | 明治37 | ***・日露戦争始まる*** |
| | | 1911 | 明治44 | ・県営軽便鉄道　柏～野田間開通(現東武アーバンパークライン) |
| | 大正 | 1914 | 大正3 | ***・第1次世界大戦始まる*** |
| | | 1920 | 大正9 | ・陸前浜街道は国道六号となる |
| | | | | ・第１回国勢調査実施　柏市域人口24,908人 |
| | | 1923 | 大正12 | ***・関東大震災*** |
| | | | | ・北総鉄道株式会社，柏～船橋間開通（現東武アーバンパークライン） |
| | | | | ・東葛飾中学校（現東葛飾高校）開校 |
| | | | | ・詩人「八木重吉」が東葛飾中学校に赴任 |
| | | | | ・柏郵便局に電報，電話事務取扱 |
| | | 1926 | 大正15 | ・千代田村，柏町と改称（9月15日） |
| | 昭和 | 1928 | 昭和3 | ・豊四季に柏競馬場できる |
| | | 1938 | 昭和13 | ・十余二に陸軍柏飛行場建設始まる |
| | | 1939 | 昭和14 | ***・第2次世界大戦始まる*** |
| | | 1941 | 昭和16 | ***・太平洋戦争始まる*** |
| | | 1943 | 昭和18 | ・この頃柏町に軍需工場ができる |
| | | 1945 | 昭和20 | ***・広島，長崎に原爆投下，日本無条件降伏*** |
| 現代 | | 1947 | 昭和22 | ・利根遊水地の築提始まる |
| | | 1949 | 昭和24 | ・常磐線松戸～取手間電化 |
| | | 1952 | 昭和27 | ・国道６号整備着工（50年完成） |
| | | 1953 | 昭和28 | ・南柏駅開設 |
| | | 1954 | 昭和29 | ・柏町，田中村，小金町，土村が合併「東葛市」となる |
| | | | | ・小金町の大部分が松戸へ合併 |
| | | | | ・東葛市に富勢村の大部分を編入し柏市誕生(11月15日) |
| | | 1955 | 昭和30 | ・手賀村，風早村が合併し沼南村となる |
| | | | | ・国勢調査　柏市の人口45,020人、沼南村人口10,911人、合計市域人口55,931人 |
| | | | | ・米軍柏通信所（キャンプ・トムリンソン）開設 |
| | | 1957 | 昭和32 | ・国道6号（小金－青山間）で全線開通（12月） |
| | | 1964 | 昭和39 | ***・第18回オリンピック大会東京で開催*** |
| | | | | ・沼南村が沼南町となる |
| | | | | ・柏市人口10万人突破（11月） |
| | | | | ・国勢調査　柏市の人口109,237人、沼南町人口15,262人、合計市域人口124,499人 |
| | | 1970 | 昭和45 | ***・日本万国博大阪で開催*** |
| | | | | ・国道16号（野田－千葉間）全線開通（4月） |
| | | | | ・柏市人口15万人突破 |
| | | | | ・沼南町人口2万人突破 |
| | | 1973 | 昭和48 | ・柏駅東口再開発事業完成 東口ダブルデッキができる（10月） |
| | | 1975 | 昭和50 | ***・海洋博，沖縄で開催*** |
| | | | | ・柏市の人口20万人を突破（5月） |

| 時代区分 | | 西暦 | 年号 | 主なできごと |
|---|---|---|---|---|
| 現代 | 昭和 | | | ・国勢調査　柏市人口203,065人、沼南町人口22,150人、合計柏市域人口225,215人 |
| | | 1979 | 昭和54 | ・米軍柏通信所（柏の葉）全面返還（8月） |
| | | | | ・沼南町人口3万人突破 |
| | | 1982 | 昭和57 | ・柏市の人口25万人を突破 |
| | | 1985 | 昭和60 | ***・科学万博，筑波学園都市で開催*** |
| | | | | ・常磐高速道路一部開通（柏～三郷） |
| | | | | ・国勢調査　柏市人口273,128人、沼南町人口38,027人、合計柏市域人口311,155人 |
| | | | | ・運輸政策審議会において常磐新線の整備を答申（7月） |
| | | 1987 | 昭和62 | ・柏市立十余二小学校開校 |
| | | 1988 | 昭和63 | ・沼南町人口4万人突破 |
| | 平成 | 1989 | 平成元 | ・柏市の人口30万人を突破（5月） |
| | | | | ・国勢調査　柏市人口317,750人、沼南町人口45,130人、合計柏市域人口362,880人 |
| | | | | ・税関研修所移転 |
| | | 1991 | 平成3 | ・柏の葉公園一部開園 |
| | | | | ・千葉大学園芸学部附属農場設立 |
| | | | | ・1都3県は宅地・鉄道一体化法に基づく基本計画を策定し、運輸・建設・自治大臣が承認 |
| | | 1992 | 平成4 | ・国立がんセンター東病院開院 |
| | | 1994 | 平成6 | ・常磐新線起工式（秋葉原～新浅草間）（10月） |
| | | 1996 | 平成8 | ・緑園都市構想策定（3月） |
| | | | | ・さわやかちば県民プラザ開館 |
| | | 1999 | 平成11 | ・科学警察研究所移転 |
| | | | | ・東京大学の物性研究所・宇宙線研究所が柏の葉キャンパスへ移転 |
| | | 2001 | 平成13 | ・常磐新線新名称を「つくばエクスプレス」に決定（2月） |
| | | | | ・柏ゴルフ倶楽部閉鎖（9月） |
| | | 2003 | 平成15 | ・千葉大学環境健康都市園芸フィールド科学教育センター設立 |
| | | 2004 | 平成16 | ・柏市制50周年記念式典を挙行 |
| | | | | ・つくばエクスプレス開業「柏の葉キャンパス駅」「柏たなか駅」誕生（8月） |
| | | | | ・国勢調査　柏市人口380,963人 |
| | | 2007 | 平成17 | ・県立柏の葉高校開校 |
| | | 2008 | 平成20 | ・中核市となる(4/1) |
| | | | | ・柏の葉国際キャンパスタウン構想策定（3月） |
| | | 2011 | 平成23 | ・柏の葉キャンパスを中心とし、内閣府より「総合特区」及び「環境未来都市」の対象地域として指定（12月） |
| | | 2012 | 平成24 | ・柏の葉小学校開校（4月） |
| | | 2014 | 平成26 | ・柏市制60周年 |
| | | 2018 | 平成30 | ・柏市立柏の葉中学校開校（4月） |

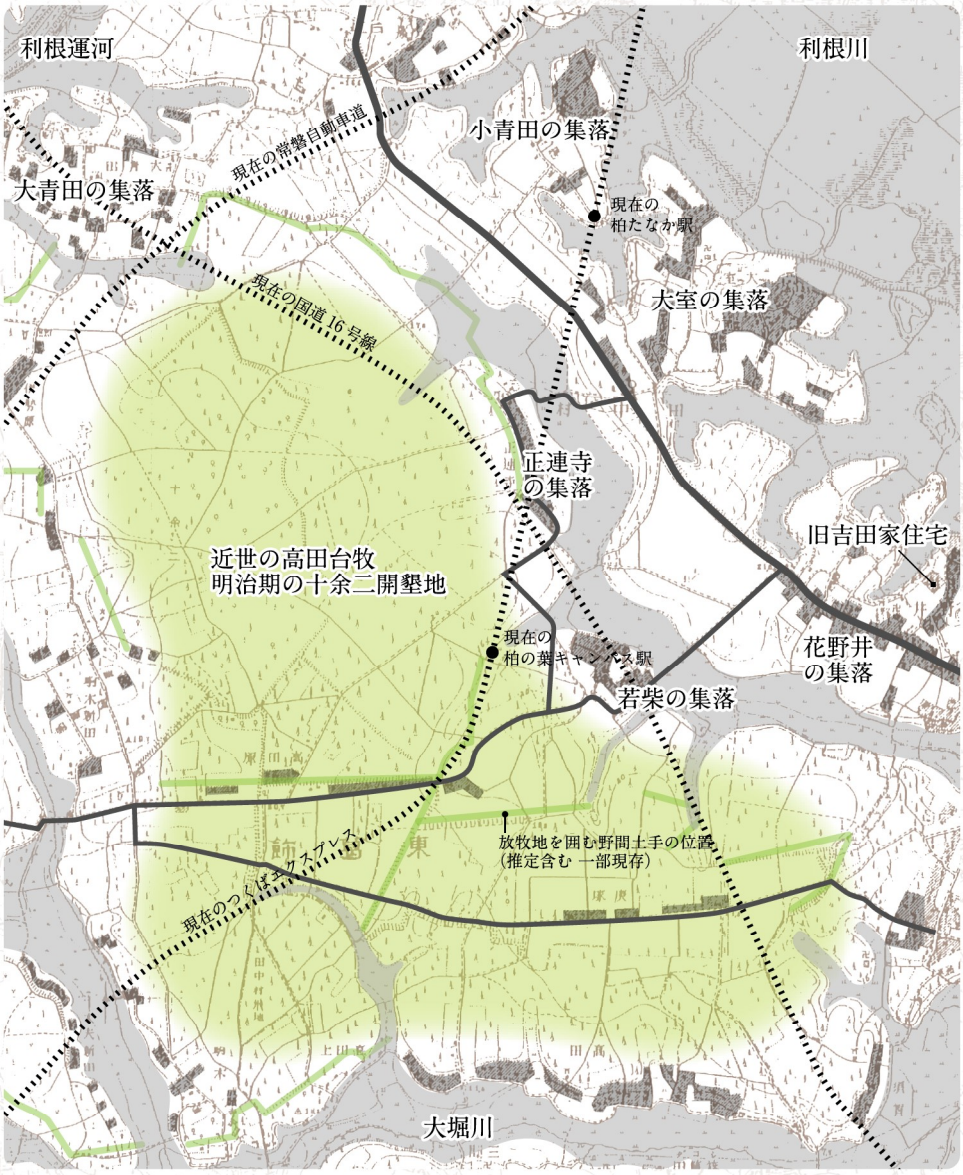
（引用文献）
柏市教育委員会. 2018. 郷土かしわ地理・歴史・公民編 平成30年度版. P99-114
柏市市史編さん委員会. 2007.歴史ガイドかしわ.　P238-241.　柏市教育委員会
柏市教育委員会.　2014.　柏市郷土資料室掲示 柏市略年表
（公財）千葉県教育振興財団.　2017.　常磐道の遺跡展図録
柏市議会事務局. 2018. 市政概要 平成30年版. P275-277

（参考文献）
柏市史編さん委員会.　1980.　柏市史年表.　柏市役所
柏市役所（最終更新日2018.1.11）柏市の歴史　http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020300/p000077.html　2018.8.27参照
柏市役所（最終更新日2017.3.8）旧昭南町の概要　http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020100/p000138.html 2018.8.27参照
柏市役所（最終更新日2018.7.2）柏市統計書　平成29年版　　柏市の沿革 http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/020800/p008433.html　2018.8.27参照
柏市役所（最終更新日2018.5.23）柏市都市計画マスタープラン平成30年4月　p7　都市の変遷 www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/140300/p045777.htm　2018.8.27参照

「私たちの柏の歴史～牧から街へ～」制作プロジェクトチームメンバー

| | |
|---|---|
| 統括・代表 | 野田勝二（千葉大学環境健康フィールド科学センター） |
| | 大鷹秀生 |
| | 笠羽英男 |
| | 河合都志子 |
| | 今野尚子 |
| | 齋藤優子 |
| | 下重野乃香 |
| | 常盤　猛 |
| | 中山千花 |
| | 浜口勝美 |
| | 校條邦夫 |
| | 山口政子 |
| 制作協力 | 高野博夫（柏市生涯学習部文化課） |
| 表紙・裏表紙デザイン | 大野将司 |
| 印刷協力 | 柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK） |

発行者：千葉大学柏の葉カレッジ・リンクプログラム
野田勝二
発行日：2021 年 6 月 30 日
千葉大学環境健康フィールド科学センター
〒277-0882
千葉県柏市柏の葉 6-2-1




昭和初期までの柏の葉地域（UDCK）

# 私たちの柏の歴史

## ― 牧から街へ ―

History of *Kashiwa*

千葉大学柏の葉カレッジリンク・プログラム